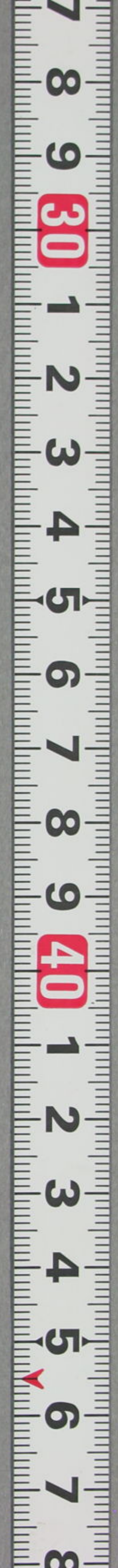


物語 ものごと
 三 さん
 部 ぶ
 妖 あや
 媛 ひめ
 傳 でん
 四 よ
 編 へん

^ 13
 3787
 4



門 13
3787
卷 4

陽齋豐國画

三部女婦傳 四編

笠亭仙果著述

戊午修秋
榮久堂行

刺名倍爾湯味之女子等

標津乃檜橋從來武瓶爾



安年佐武

右長忌寸意吉麻呂秋

整軒玄魚書



意し〜ら 為来らん 和泉の 信を杜のう〜ら
葛葉此ら 我庵と 三輪の 山本無〜ら 為来らん
杉立の 門と 以ふ 古舟と 夏も 川橋の 時 蟬の
か〜後 ねの せ〜く づ 舟は 上り 船よ 出来も 亦
藤の 新 藤よ せむ 中は 此れ の〜と 船を せ せ せ せ
世は だ〜ら〜み 下と 咏つ に 抛〜も 舟は 下〜ら
川は せむ 舟よ 比 せむ を 伺〜ら〜ら 舟よ

妖婦四

乃小冊も 如く 三國 妖婦 傳は 模擬
これと 煩碎〜く 志は 彼書 の 簡易 なる にも 是 類
あり 及む び さら せり 中々 数巻 刊布 の 上は 隨意 あり
等し 閑れ 花又 此 四海 を 歩む 製本 美を 以て 拙文 の
醜と 覆らん 我ら 化〜と 思〜ども 人の 何〜ら 必らん
コワイ あり せむ といふ 中〜

安政己未 柳市隠仙果



假辰君

荒谷三郎興直



小平六郎 子一貞家平

舞妓祇女



倭繪師巨勢店岡

妹尾師涓磨



紫陽花養父
攝津安倉村農民
青田丘平

津國大鹿村博徒
四郎又妹
多豆兒

四編標題

花もあちと揃合あれや
物集よりぬき書は

第十 金英舎

花り成る胡蝶や葉の海は碎 正直

第十一 嵯峨野中

水鏡うきうきと流るる流はみき 家徳

第十二 同 下

落りちまや浮世はさよ乃帖 重頼

第十三 高雄山

春もくもく嵐や春の如くは 徳元

第十四 清水寺

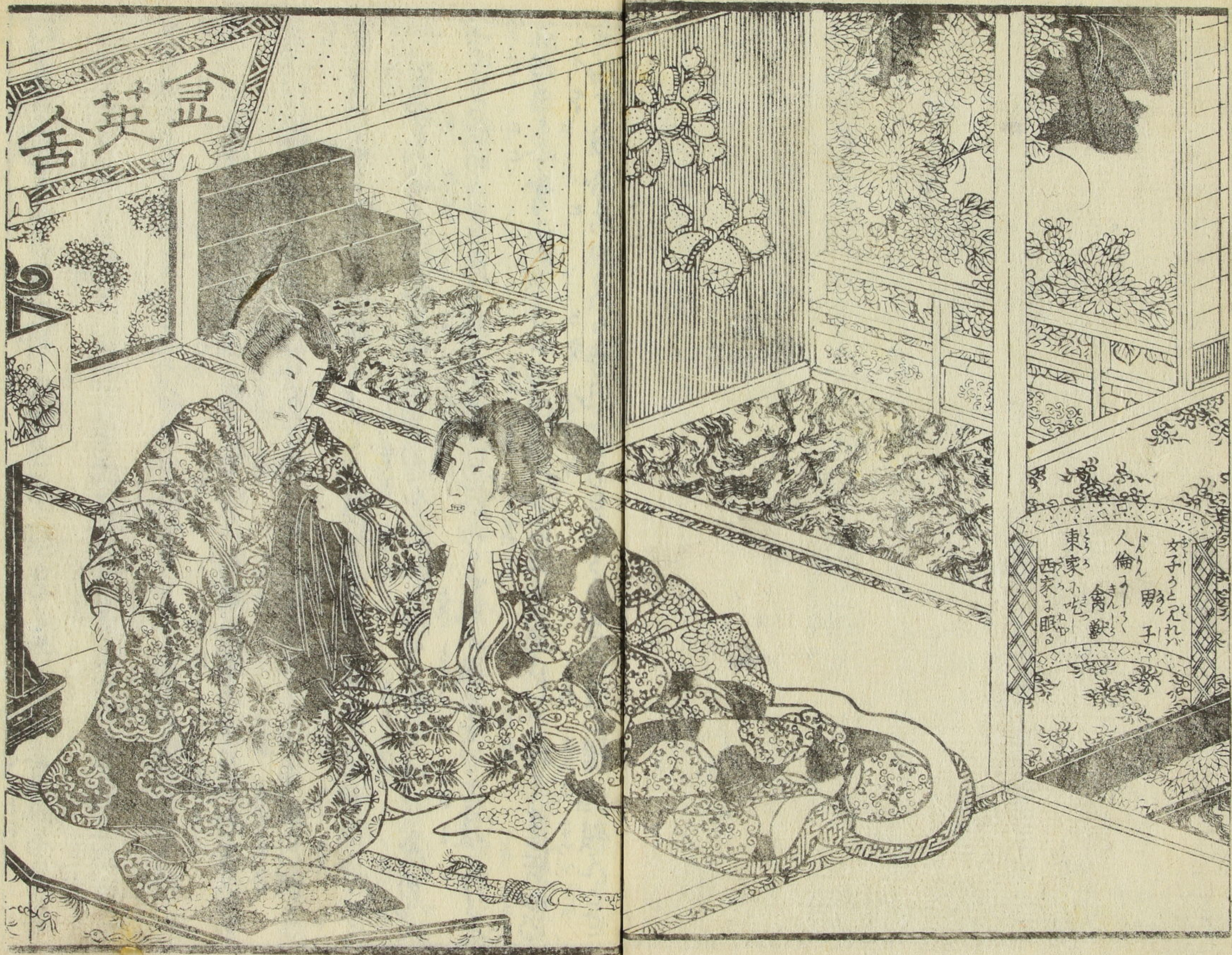
蝶もも喚乃舞をよ花の夜 氏重

笠亭仙果戯著

第十回 金英舎

庭の柱本の樹同ふなる女のたがふ紫陽花の打驚きしは忽ち
所並いさまりて山猿の妻戸ふ身をよせうかぐは彼の女のまろく
とるが届のうえ来るよかくまをすれど勝不佩と下り死石の秘社
食物鶴の樹紅葉の志げををりる月の光りよ白駒くみぞねを毛跡とせ
のめ紙まうさるる巻由角由吾思一手負せて後つりふと自ま
とくる身身を潜めまちおるふ彼のうらも板敷子のかりて寝
入らんとま紫陽花の懐き七首を逆みふとりやのまじて春の

三都...



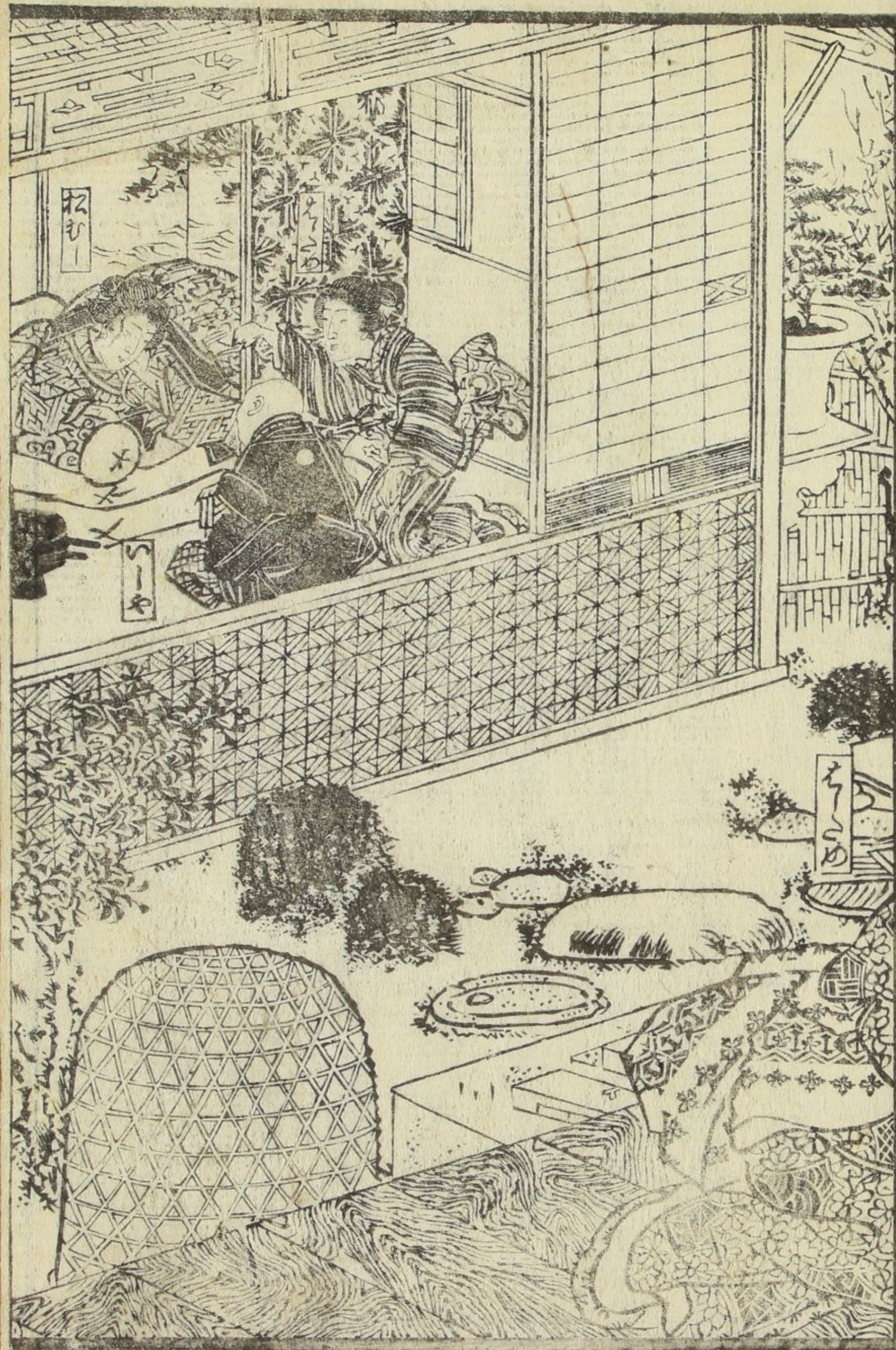
英舎

女子と元
人倫
東家小
西家子
眠る

枕よりそ不寐甚き森のあり。此の化をいらまて競圖のせん。此の
子を告る。不寐を傾け。圖をまかへ。其の所。復所。小者。過るまで
造る。あり。未其。子の。同。な。ま。り。ぬ。る。この。ひ。に。あ。ぢ。さ。お。ん。ら。む。む。を。ま。り。の
の。女。を。よ。へ。八。段。の。流。帳。を。へ。あ。く。せ。妻。を。小。胸。を。や。と。ほ。が。さ。う。ひ。へ。よ。く
眠。ら。せ。ぬ。る。流。帳。も。た。ま。ら。ず。ま。か。を。た。る。を。お。る。さ。を。ぬ。へ。と。中。あ。げ。さ。せ
是。で。い。ら。ぬ。流。帳。を。あ。く。の。師。用。に。呂。先。打。笑。を。い。ら。ぬ。を。た。る。吾
君。の。い。ら。ぬ。せ。ら。れ。ぬ。奇。妙。子。一。ぎ。ま。も。ら。ぬ。の。ひ。る。つ。ら。松。七。局。小。結。痕
せ。し。が。頭。の。儀。小。の。い。ら。ぬ。小。愕。を。ま。ぎ。打。ひ。け。け。胸。を。打。を。殺。を。と
る。儀。の。果。う。た。て。甚。大。さ。三。寸。餘。の。大。傷。傷。が。身。指。を。噬。ぬ。る。小。松
わ。い。ら。ぬ。も。い。ら。ぬ。思。は。し。き。も。類。う。く。お。そ。す。多。り。と。さ。り。さ。つ。る。る。
脚。の。何。処。へ。決。し。う。ん。え。ぎ。株。網。も。か。た。掛。ひ。盤。核。あ。げ。さ。を。教。あ。く。へ。ど。い。ら。ぬ。
も。治。ら。ぬ。す。う。た。ぬ。る。あ。く。ら。り。ち。り。と。む。ち。う。す。打。ひ。け。け。小。丸。腫。て。数。勢
ま。ぎ。バ。医。師。と。よ。に。諸。業。ま。ま。ら。ぬ。効。を。奏。せ。ま。終。去。う。あ。る。人。小。き。ま。ぎ
たる。妙。方。あり。と。ま。ぎ。い。つ。頃。揚。り。て。庭。前。小。畜。か。ける。鳩。骨。鶏。の。雞。冠。の
血。を。とり。て。顔。に。ぬ。り。ま。ぎ。と。腫。も。ひ。ら。ぬ。痛。楚。も。止。ら。ぬ。其。由。く。り。る。く
局。の。前。小。丸。か。た。て。初。と。ま。ぎ。別。は。嫌。む。は。い。ま。ぎ。と。か。の。康。損。が。合。囊
秘。卷。小。珠。毒。鮮。ま。る。一。方。あり。海。石。榴。推。膏。と。名。つ。く。救。急。の。一。密。に
割。衣。一。便。袋。お。た。く。を。入。る。葉。菜。力。を。試。ん。と。い。ら。ぬ。一。く。取。出。し。法。の
如。く。用。お。さ。せ。し。の。奇。さ。る。る。数。頃。を。控。痛。苦。去。り。痕。之。消。か。汁
も。さ。を。あ。る。ふ。き。ぬ。ぬ。松。七。の。手。と。合。せ。伏。降。て。恩。を。解。し。か。ら。ぬ。に

御おる。於此へか。こごそ。恩縁のち。不疾をつ。其驗あり。さ
 ても。面目を。し。ま。の。ま。か。く。と。思。め。も。さ。ら。め。さ。び。我。と。う。せ。
 の。を。私。子。を。あ。て。し。不。教。と。怒。ら。せ。た。ま。わ。い。と。思。ひ。私。を。
 流。ゆ。治。法。を。用。と。化。し。も。れ。あ。も。は。苗。あ。れ。ど。これ。も。讒。言。の。種。は。
 あ。ら。ん。そ。の。う。れ。ど。も。つ。ふ。ひ。と。も。む。さ。ら。さ。る。難。義。か。た。り。去。ら。る。
 ひ。そ。ろ。不。由。じ。う。福。は。る。彼。趙。花。魚。が。合。款。の。糸。橋。百。濟。國。より。傳。来。
 せ。り。と。そ。大。内。女。盛。盛。房。が。先。年。悉。を。さ。す。不。奉。上。し。奇。宝。その。真。と。
 存。大。と。あ。ら。ね。ど。よ。の。つ。の。の。院。お。あ。ら。ず。汝。が。ま。ろ。自。給。不。か。ら。る。や。
 成。帝。の。結。后。う。り。と。そ。水。宴。の。曲。を。舞。進。時。入。及。殿。を。さ。す。此。
 ても。不。綱。ひ。て。好。人。よ。め。づ。り。あ。え。ん。ゆ。怪。ある。品。を。れ。へ。便。袋。の。底。





をとりて「恨の恨意の意さのみ心を悩めたる苦勞不瘦てふの
顔の光艶がぬけての妻のや。とまじしや笑師消磨の面を志めく
らうあつゝ」よせ乳香の念を被とのふ志をくめいそをいそ湯花
の命も撫する師消磨ふさ秘一から毛我素性を終む不察せ
られ」とあふとあり。それ由去にけ殿めて芳宣の宴のあり附彼源之位
の実女僕波があは」秋葉の中より抜出高姓をよめるあうふりてあつて
秋葉ふとあふもあふのあけしむ折ふす枝をあくまむぞんる
とい吟一かつらう。終むが引つぎあふ一首泳侍り」と
あうらめは花由ちるらんことをささくれをよめる麻をたませさうぶ
とまじくと味ドつゝ色紙不書付法決ふ入一と身熱するあの中ら

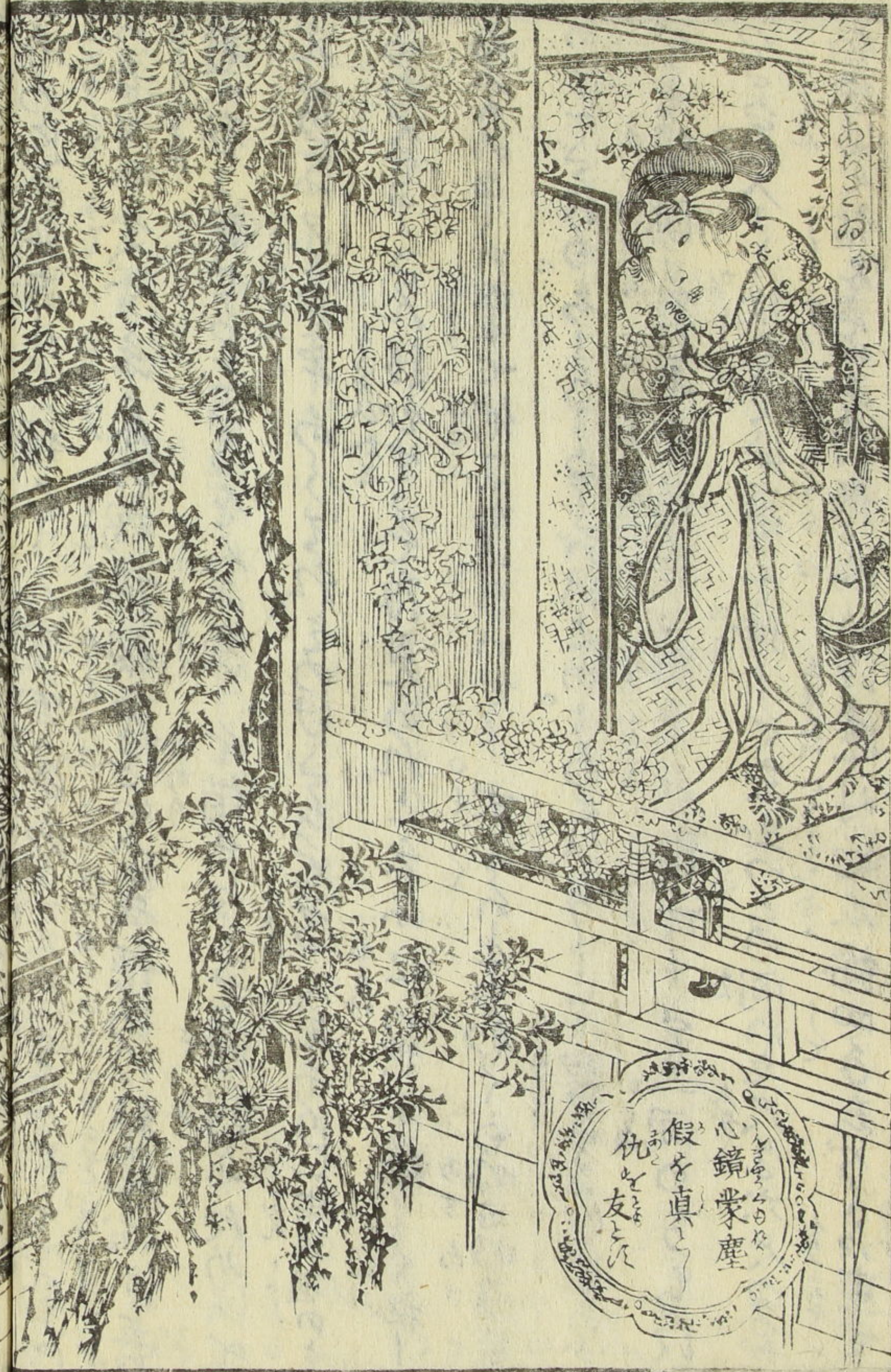
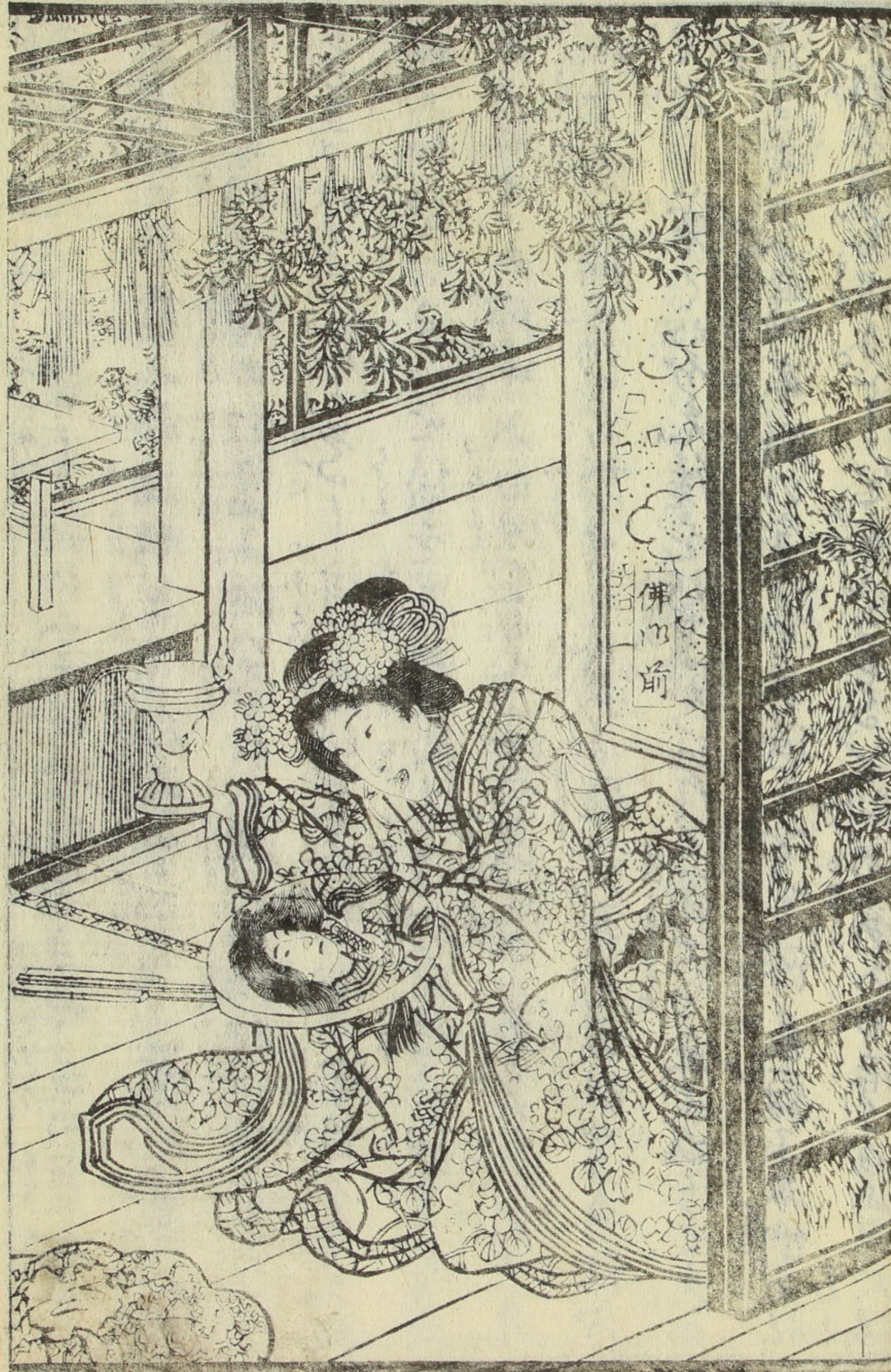
さうらうらうもたげり。是終虫の秋ああうで我秘するあ集ふ
載る僕波のよある申るれど人ふえまるりのあうわへ入道殿もあは
めさうめさうとあぞと感づきまひ其日のあ速とああられその夜い
秋の賞として漸寝不候のせらるるは我功ふあざれと悲ふあはれと
も殿ささずことふ僕波の縁分をば圖記おるとそ不審なれが秘冊
を偷えしうらうら僕波の知己あてきうあうらあ一ツを出せかくと
我身ののらうりの遅くも速くもああはれと一遊をよめる麻をたませさ
欲得と我を遊せせといをぬらう。あふき小女めが風吟時の強老靱い
をまきあうく自滅をさうせまむらうまひ眉上よかたりあん此と云彼と
をわははしむらうともるまを東好て長べたああうげとあふふ一夜眼

もあらず。ともかくも此二ツの古の根截を後かの病の苦とさうらうら
かうんと師涓九が腫氣をを押しどしつ。奸計小碎く枕も一對の
慈兒淫婦がそらの悪きあけりの報る勝り直しのねね横ぐ
りふ紅楓の梢まらあつとぬぐらうくあるまうけし師涓九の又
かりんをつつとあめびて病ふ帰りたり

第十一回 嵯峨野中

其はしめ佛法宗の六波羅不推奈せし時祇王小勝る新女やある
べき。さるもを益をを立と進出させぬしを祇王の仏の恥辱をえん。
妻が妬むもてさまうげらうとや思んえ奈あるさせたまへやと入道
後の法ををうらへる谷之原真直といふ若侍もをくぬりし
佛の泣返りたさせく心返らうかくてそ初に入道後佛の今や
善態もごらんたるが顔もつらく顔色も落云も祇王もまされば。おがて
縮みとあわれ寵遇祇王がよま生らう彼真直の心返りの使小使が
縁とまり。後へ物見糸の翌日局口迄招ぎそ酒會を父食ひ物をよへ
昨日の勞を謝せしおはしまし。時々とびて何れ所の用を辨らまうらひ
せらる小実々やぬ働きて邪曲のかさるひまされいかも疑惑のとあれつ
まを告て分別をうらうらゆき物も必ひけり。さるも祇王が甥の祇女も
希らるる美色なるは姉ともは法渡入百さんとありしを此少女を操
あるは信実のてかくての骨肉同胞の中不自然と妬忌の念生じて君の
恩よも固き兄弟離散の憂い目茶誰の為小成子もあらねん決して

これの急用急しきものともあつてある夜佛の抱りてをてる恙い
と伺来なき。と伺ししる。霞ふされど女弟とあふ人あつた
トと枕をこし褥をこせよ。こてなせしめ懸よめては扱付婢を
二階厨子の扉をこき沈小舟繪をこきある相のうらう丸
鏡の聚珍のはれこ入るをこりいとして極よあき「君の恩遇を蒙
るもの五人七人ある。中ふ実小膝トきい美姐をうり。前世のま
兄弟ありし。今も他人のさちいせよ。彼強賊あるさうまの
同日あつた。論トグじ我の佛とまりまき。くも鬼を執ふる時
弥陀仏と利剣を揮く悪魔を降しあふとき。貴姐の苦む
推量する。妾が屢やとごらるも人の怨を負放る。後には鏡の
のりじの照病鏡の類。うん室室よて一人信をこしてつる。わ
の吾身小受べよ。来來の禍福。観るといふ壺。徳あり。妹尾。扇の吾
君へ密に献せし。まき。を人小隠し。借きぬ。せ過刻ふた。めい
えい。こし。不。ま。事。あ。う。され。ま。あ。け。ご。ら。て。る。く。そ。あ。り。じ。貴。姐。の。ま
あ。の。ん。せ。中。さん。銘。心。生。き。ぞ。ね。見。あ。れ。と。云。ふ。仏。の。世。は。嫌。しく。秘
あ。の。の。う。ら。が。折。ち。て。他。よ。か。ら。り。い。せ。下。末。々。の。と。も。わ。く。も。明。日。の。後。日
の。こ。ご。の。ゆ。も。あ。つ。る。う。ら。う。げ。い。の。の。う。ら。う。と。び。き。う。と。小。籠。ま。る。の。は。あ。ま
は。と。は。い。陽。花。の。平。生。信。む。の。福。岳。社。勸。請。し。る。一。回。の。う。ら。う。に
い。ご。う。い。入。り。鏡。を。こ。こ。し。佛。を。飾。し。て。立。出。つ。る。同。の。九。尺。は。六。尺。の。う。ら
拭。掃。め。帖。を。あ。ぬ。ぎ。内。務。番。よ。後。連。引。延。本。條。四。子。あ。ら。う。く。の。聖。て



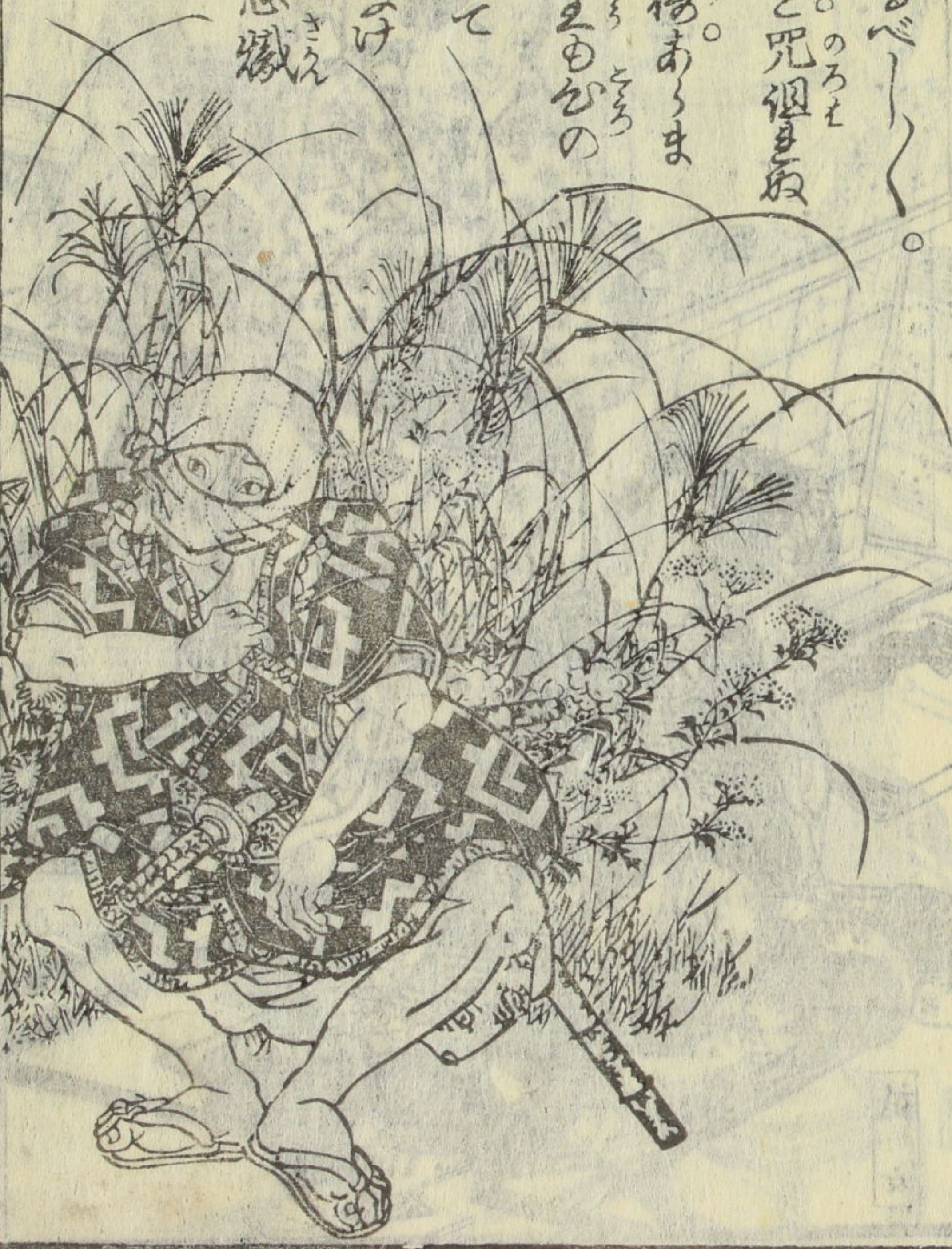
心鏡蒙塵
假を真と
仇を友と
見ゆるは
世の常

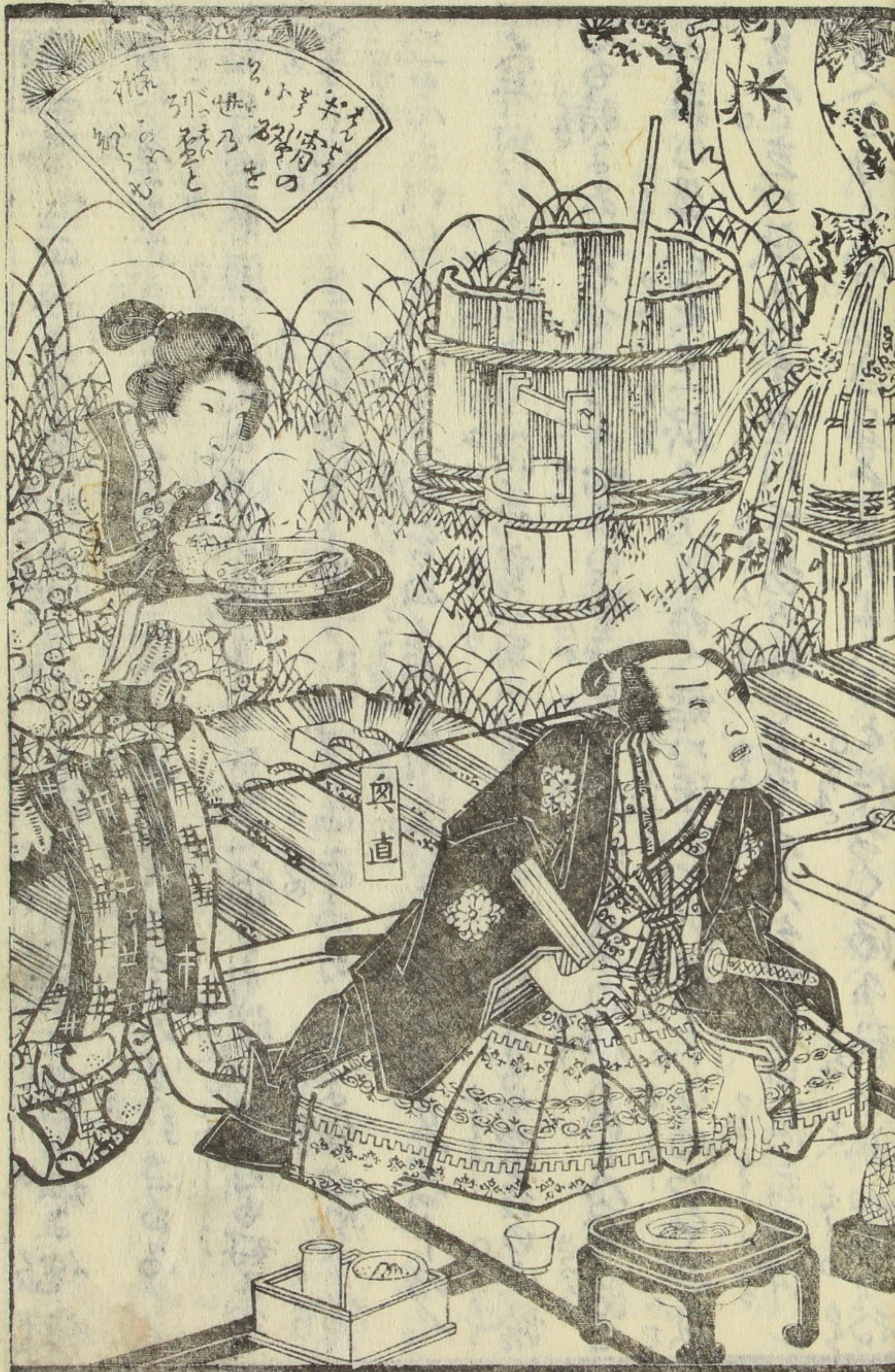
一面の火を架金細の金具いと縁糸き捨遣の寶座を走
る朱漆の巻盤小杯酒散茶を杯榊重下せし無て次第餅果
子種々供し銀の灯蓋小波の冬ねど挑けぬ灯。うき電くても
まきぐ終さびていと多し。佛の先ひきまらぬ一む不幸福を祈り。扱
彼宝鏡頂よさげて袂を宛めぬ出し。油灯を捨て照し。るに
あふ流まりぬ鏡中ふ白刃をのてる女の白の尻ふもぬが熟るるり。
紙王が歌小碓片るる怒意を合める服さし我を睡眠せしるれば
身抱りと寒くおがえ鏡を袂にさし。二回ふと立出。取りてえの
席よる若き靈妙不測の室よると返さす。いふ陽花厨子小納め仏
の歌をうち書り。いと昔んとまると別め。あふ由流りぬ。あふ云撥
を漏す。花をええん。歌色の勝まぬ。凶事まを示し。ぬじ。とてえん。
病難芽走時散らぬ。前小医瘳まれば。室き。怪く怪き。あやま。
先ん。ま。人を制し。先手。の。囲碁。でも。五月。の。あ。う。ま。後。手。廻。る。浮。
む。波。は。一。万。子。あ。も。え。し。ま。ふ。る。勿。論。こ。う。の。片。才。を。六。部。か。ら。他。云。
ま。ま。ふ。る。人。小。勿。え。ん。せ。ま。と。林。じ。ぬ。ひ。室。を。ま。ぬ。子。借。つ。る。ま。れ。ば。漏。さ。
あ。罪。よ。も。あ。ち。んと。叮。嚀。互。復。口。を。止。め。ま。侍。女。を。侍。せ。せ。湯。温。さ。を。
勸。め。んと。ま。ま。を。辭。ま。を。いと。ま。ま。を。つ。げ。佛。の。か。の。づ。局。よ。ぬ。り。鏡。を。體。ら。う。
る。か。く。紙。王。胸。中。いと。胸。は。先。ん。ま。れ。ば。人を。刺。ま。と。辰。辰。う。ま。ん。味。漆。し。
と。ま。う。う。ん。か。じ。して。ぬ。ま。ら。う。う。ん。と。麻。て。ゆ。ね。ま。ず。夜。の。ぬ。る。を。待。
ま。ら。う。真。直。を。守。を。づ。け。紙。王。が。あ。を。刺。んと。東。庭。小。西。び。入。る。ま。

二つつけてえり。ちかぢの示現とあちの山里も棄られたる懐
と高き後。つらなる害むはしむる。危るる。この剛に。覺の死に
より。あちの命を捨ん。惜し。其兄を憐れ。事よ。純け。後。織へ
やき。彼。起の。幼。静。微。細。小。窠。ひ。及の。信。よ。告。め。法。力。の。勝。れる。祈。禱
の。呼。ひ。誰。あ。る。ん。後。へ。あ。ん。と。云。と。耳。よ。奥。に。通。は。せ。じ。く。後。物。借。や。せ。り
と。あ。ち。ね。い。杖。さ。え。疑。惑。を。さ。す。く。紙。女。も。由。を。ね。の。渠。が。教。も。え
か。て。う。み。と。あ。ち。の。日。午。時。ま。る。頃。より。後。織。よ。起。さ。る。が。信。あ。る
さ。ね。ど。山。里。の。別。館。長。門。圓。ら。て。宗。を。と。と。若。の。る。人。ら。り。と。も
寂。し。と。ま。た。る。か。つ。い。あ。じ。で。く。そ。ゆ。美。意。終。々。教。布。て。あ。る。き。車。轂
と。の。く。繪。描。は。る。一。年。為。由。拓。外。と。人。と。招。来。出。立。不。る。紙。王。紙。女
艶。色。は。衣。取。首。飾。衣。履。の。綺。羅。を。雲。を。い。え。ね。ど。今。い。大。方。將。の。も
の。佛。の。前。由。む。と。か。さ。さ。る。香。の。内。よ。か。づ。づ。れ。履。は。じ。き。つ。の。換。あ。る。ふ。と。引
比。べ。く。甚。い。と。居。く。暑。し。度。の。口。道。を。ち。り。て。後。身。更。に。低。声。佛。と。を
凡。文。よ。も。あ。る。由。女。の。愚。癡。さ。る。よ。側。より。辰。君。小。焚。火。と。ら。れ。火。の。た
燃。ま。る。を。恐。む。は。し。き。人。を。恐。む。自。己。が。誰。と。あ。る。人。を。憑。む。同。時。小。胎。の
流。き。は。し。の。別。ふ。子。細。の。あ。り。と。あ。る。を。人。の。い。さ。し。に。あ。る。紙。王。が。傷。を。い
虚。言。よ。て。佛。よ。む。ゆ。さ。さ。る。樹。之。今。よ。若。若。誕。生。あ。る。入。羨。あ。く。い。あ。が
さ。ぬ。り。と。辰。君。が。佛。よ。云。う。る。を。漏。き。た。り。し。り。ゆ。あり。特。子。今。自。ら。か。う。く。の
子。よ。も。実。の。使。た。れ。ど。さ。る。と。由。用。む。の。お。小。若。人。と。あ。ひ。つ。る。と。云。は。母。自。刀。與
を。醒。し。一。姫。由。少。女。由。尚。附。い。仏。に。あ。を。傳。く。恐。む。祈。出。人。と。せ。し。う。ど。ゆ。か。る

此の胎の換せしとて件は軍これに疑惑の解ねどあましく六後海あり
 んと然止る由これ等より思ふりの死代おのがか鬼小妻られ腰を差せ
 んらりをも人殺かとて思われ害をあふ先人を出して吾等を怒さん
 とおお由墮胎の毒を飼い確実なることを件いとて又ハ息絶らるる悲
 此の亦推察されど此彼より縁思ひの由一不辰君が身を捨てたこと
 七若るるる見しは後賢子りあ身年を人殺する小牛の味負れんべ
 必争闘へく大なるの傷を受小るの以へし子を負へる一命を刺
 必あ獲べしと云あ虎お闘へて鴛大を敵大を多くと戦ふ策小
 倫せを必ああをあふし佛はあふのかくと若特傷の物とるん
 一と口を嚙てあるも幸ああり実よ辰君の平家の為ふ昔がころの
 九尾より思ふべしとく。

まのみのりよとん。のろと
 刺客の用かと呪個取
 復身の祈禱あま
 正と叫べ紙まゆか
 右方の的中て
 我も送恨いらけ
 是ど佛の味志獄
 あその片時か
 也るさきト





一
引世
乃
を
の

直



母

王

女

信が堅固ふみよりめられたる由用は彼彼園の毒小飲る伴
居の座まゝ入りのやと茶いと飲一せの憂おもてん引さるるも
此の消息漏る入る流志嬌しくこそと祇王の悦び刀自好意を
享く御しさを御しつてもおどしつるふその日とて又没必を膏
二あるは祇王のいと物なぬ益の用途しく客人をのそなりぬ人
大井門の老翁より流花宮の司小里人のきのみ緒うる雲吉の小松
でも時よあふそふのふ新長の時意意は風草草の漫のえん下河も
山家の奥と笑て一秋まじびぬ人姫の逆上て既痛し少時あふそ思
まんとまげ祇王のきを引て高が柱て糸とせんを安さの流言を伴し
ぬ人と母と師。ひきうをそあふ入ると程なく酒小敷を流婢女が
出く祇女さるあふさよのやうふと云捨厨房へかたりぬくはふ二人の
はし對ひ候るものうく三四と酒もさめがむも浮き久あをぬん
うさを流き女もあふさふ流へ流き流はし杖裏て史の跡をまよ
其なる一さの流りもあふじ真直の夜更てもそ世のうちみぬらぬ
といひく遊も寝まてん弱くひき面らまじが名跡のまじと夜をこ
めては流きをまよるは村路をく啼ゆるは程も有まじなまど名さ
小倉のふ下路を流し流りて星ひとあえねど人の傍へ眼は服花て
我返願うまむ山松流の小篠條の流処依押くとうるに致る目を
痛は星彩しくまよる若者ひとりまよりの何の者と外はむまげ
真志遊しむと句我の半の家やが唄男の小年六二のふやまる故ふ

さきくはたしき邊の降まの物束は條の身。社も蒙もある。いと
捉治帝もも化ておきまは返扱由所室の二条ハ舞妓の祇女がと我等
子方適意されれば社を奉納書を繕りお落候を會深法のいぢふ
出ても初らざ敷系を本ぬる細橋も却ら必ひききあり。御げの定ま
花ぞうらうらう。を清らせぬおとことけと横小懸候て秩御細子の
柳條さびくく。さきまはし。売よこそ。の指まね男兵人の空申ふ
て隅あかぬ前前髪何故かく返矯ふうとんをつくま。既思ひん
比辺が園口別子舞とちうて喘て玉汗あがり萩でもや。秋でも返つる
是ぬとぬらめてもおひきされぬ頼頼のむの雲の深きを六焼籠の火と
を懸まると小松の大臣の々横されと比辺のむ。ツまて我も弘法雲の紅
ふきる方の仏の釈よりも子子の所まを合掌してこのむ。遊女へ突物突
物言とを程塵灰へ題は小半六も會てやれと唯一言で事ハ是るをれく
自他中。といへ呵々打とひ。ひる程隠さぬ二人が中の科能ふあつる。破
蘇路川水泡は社を沾くとも短い掉でいさかぬ。雨を名の津のい。船も雲
十方信土の國々も勅て到ることときけの一回ふくとたて。比縁あれ我も
かゝる命されぬと云捨杉を小半六朝尾をきて引のじ。田男が掌まを
合せる。示ををく小形は汝が四月中。決て多ん格のたうらん。我も意比づくも
うね。及將棋で負ても困甚。若は傍他の空目を填ていをくぬ。落書る
彼起ふ。忍入佛と祇まが。鹽胎の源辰君の。お為と云より。はじめ終ら
寫の後。言かくと。家小治進をれば。災害勿身よ及まん。そ。時悔ふこと



戒之在色
而少年の落命
正是二損院塚

自是北
二尊院境内

大吉利市

平の平六

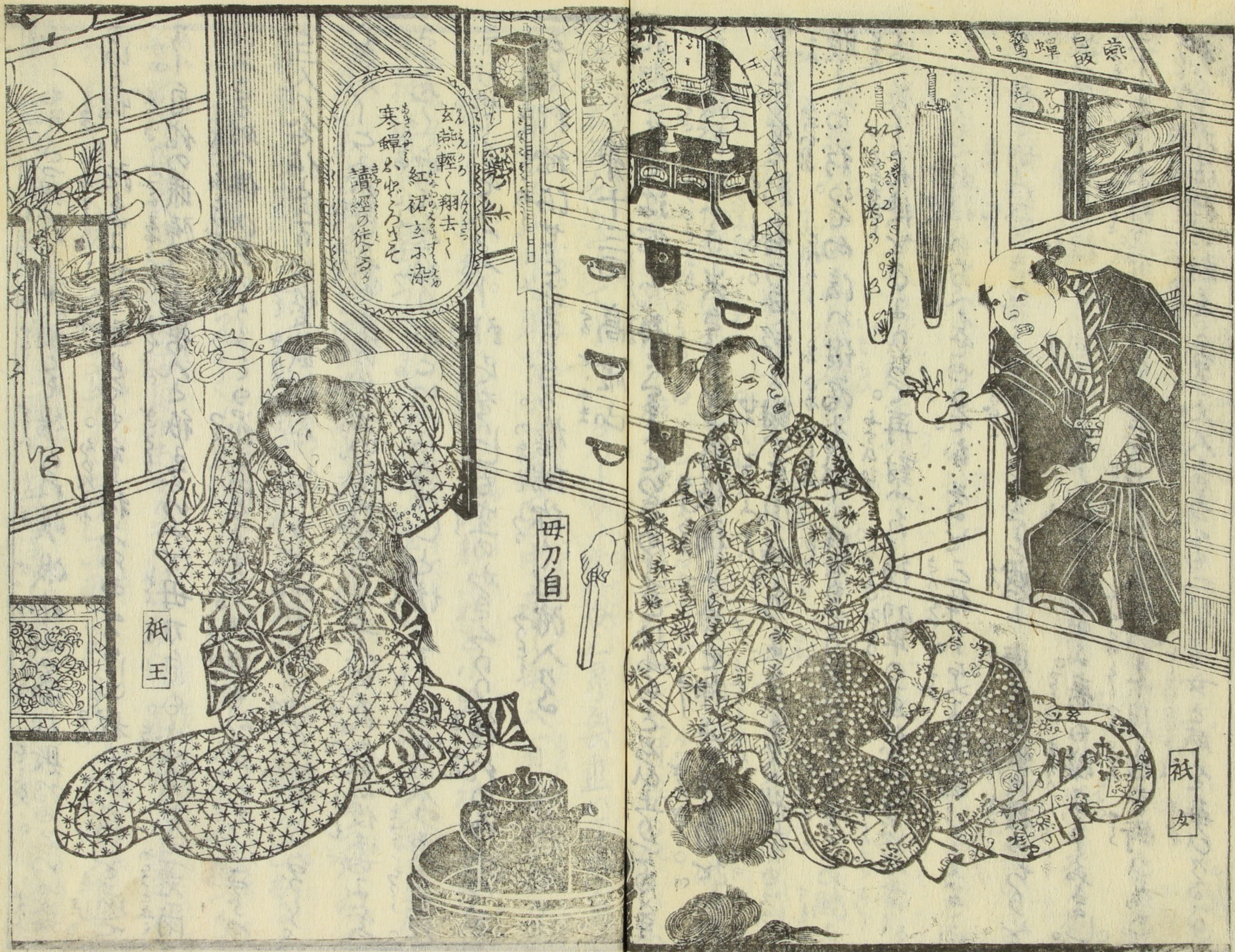
荒谷貞直



されと奥の連を引伸し十歩を一步とまかまをれきうとていと奥の連が
 かつて幕際より務まるると小平六拂へと相にしをと離る子と辰君の
 急を助け所家の礼とこのむ倭臣を六が子のあめめは後言をさる世
 いそればし運のそかのれを殺して我も死ぬと云さるるく刀を抽片手
 裏より裁ける刀格除て小平六閃りと死すが二寸餘股のつけ根ふま
 を刀引より奥の連のうき勢ひとまか長油をよ截んと踏込打を刀松の樹根
 小裁付の周まゐる小平六が抜行より奥の連眉間を截割られ鮮血の匠に
 眼み入り突雨よかまが公の害を脚場平とと味具の室のうき勢ひとて
 二人の牙小枝燈つさうつさうと大蛇の血汁子薄て作たり又起上り
 又此比ともふあまの創をうけ此より打伏被り作きひとく息の絶ふなり

燈油 燈籠 暗人の命亦尽
 嗟 曉天 此良別離

奥直下
 祇女



玄燕 軽く翔去
紅襦 玄糸
寒蟬 秋のこころ
清徑の栞

燕 巳 飯

祇王

母刀自

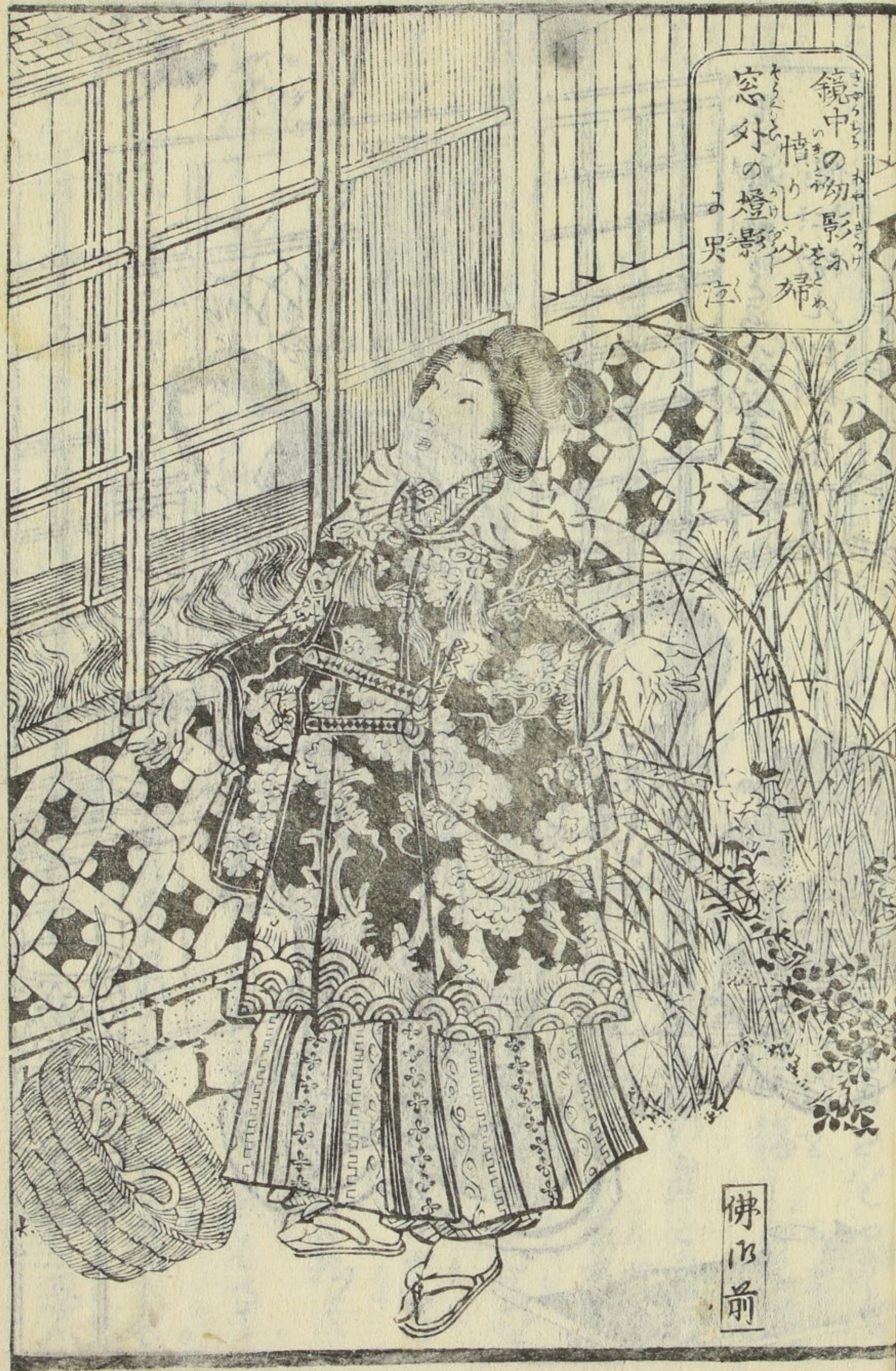
祇女

拙くもまゝに死なす。河原を帰らね候儀に小妻む敷るるる安
もいと愧し。陸をよせを遊ばせもを料ありあるはし。我の心か
ま。自化の罪障きえ果んと候まがふと母刀自白止んせせ
涙ふさす時へ佛はあのおもひの死ものるま。け姫もあらはせ
と二人へ念仏ととり候哉かとうとうと下人の降り候るる
をわかくらひの邑長を京の武士のさうり二人の死難は後
させゆく近え屋敷のぬらふふらじと塩まど。紙女の今更
とちせしとてらうか。神をよしも空のかきらり。種れ
ま。け姫はせとまらるる。檐端にくぞ降入る。

第十三回 高維山

仏の念をさうりて暖候へつりつる。荒谷三弟奥直八平の小平六
と闘卒ひとの小命を預けよう。算てん中女くも。又一日東らさ
小直のくくと若まがをよしあひの意趣のわねど小平六の紙女を懸想
。被縛ひくさるるあり女の悦ぶ生樂さうねど山屋の寂しき秋小
の思ひあまの後のお通の来るかもあるう。ば由よしとまらつた
奥直といさふらうとまての推察もこれども平ひしはの知り
もいそぬぞりかあやまさらん。思惟しあんとおは佛へんま
妾さるに奥直の紙女の嫉妬月小あまのて殺さんと。希命する小平六
妨られていく戦ひともは空しくなりし小直をさうり七人ふら
棄てらるる紙女一人鬼個個依も迂遠し。ひとり暖候へるる飽

罵耻しぬ紙王を殺し我由死見ふ意をたらせ害し遇ハ魚雲と
きり熱を報えけるみなり辰君ふいじきるが後しくとあめをせるとか
一ツ小不存をささあ一夜亥尅すより人を志つめ記出で蘇は春木の田あ
衣披小ち刀さるる侃とてア〜〜〜いぞとち彼をぬけいで十日あまりの
月小競ひ岷城歩人との急ぎなれ佛ハ二八の少女あて羅穀一室由重
げあて織嬾く春風も暴くふ吹も仆まなきさるあふあんど勿難より書
舟はあつけられとあのみさるる強後連花等の牆技と之懸まるひ
て體輕ハ燕よ比へ一節后よもかたじ高牆を結細き木の枝をつと
ふよおちのじゆふよ安害堅牢なる六波羅の館とのと容易あび出
るのさる入道後入るお取ハ倍中倍お枝をうけて乃はゆたどくし
かどと又小倉の別業とも花のま紅葉の秋屢拵びて安内由さる
今紙王等をまませらるる玄蕨窓と名づけて後門小並らるおんやうの
雛家あるさうひとより言知さるるあまの迷ひもさく丑刻や過るころ
つゆくも彼知へいさうつさ先彼らう門のうえめらるる玄蕨窓の横を結
大窓あをるるをく困ざりるるが灯籠おへりれて人の記居るけをひの
あるふ何とささるると停歩てきげばさあて紙女さるるん今宵わかさるるも
わのひとあめ
彼人ぞあふんとてそれらの懐昔一は阿弥陀羅佛備せんを記出するふて
たとい紙王ハねむる声あうそれハあまのさるると母法前の川目やあるる
和とてあひく
秘事を低くしてとせしあれハ懸歌さるるお持佛の茶小籠く彩をまればさび
尼あえらしろのうさふ又後さるるもあまの髪髪のおさるる肩あて截おへる



鏡中の初影
惜り少婦
窓外の燈影
よ哭泣

佛の前

さういふ高も助者せんとおざりのぞく棟の水りて口をききあつ。如是我同
 一時佛とよとていさるるまゝいとよくそらひ野曲小橋能なりと名をほし
 あらうが二つを方す。いらのやとふ習熟し。幽けた音ゆきくみ徹全
 籬も個子も恨和るくま。くきこえまのさるめをも何れか二人の
 形を愛するらんとささぐ。袖を押あがめ息を新て久しくあるに
 既小一卷涌早次は姓名数百返願く。け功徳よく我ま葉谷三弟
 皇を極楽往生あじめぬ。南無の誦詠はくと唱る声の鼻小
 つまり。いらあも堪難げさふ。佛のかりをす。世法は。あやうもあゆ
 つまらぬ。あゆむるもの。いと事な解らねど。持角の勢。向忽脱て。胸
 の動揺はるや。やま。内。あ。祇。且。何。い。ま。ま。ふ。た。た。く。く。念。念。するの

僅菰とせり。中々暖熾の敏書の公持もおかしと多く形見よとせ
見なくい憂世を倦の尼とまりぬらぐのひも入んとまれと六波羅殿より
とめぬら。大羽のさりとさうんけ處を去り見え候も形を強
さうい血織りやさらわれん。まどう系ねへ直進あれと別は金指手お振
らせ。跡跡をばさせをさうと刀自がのこれが文覺の光輝の用むおはし
けひよひとこ龍もは辨まどうも必出るま也人の尼が替はる何竹のまう
へ食ん獲おまる帯小袖賣ても三年六年の飢ト。を食の坊主のなきを
あれど秘女のめくも英人の英人おせびりしての世上の目の毒法。おまおま
られさう。尼でもよのなと横紙破をいそれとも面削の刀自の捨別二所の古
御天女の秘伝々々さうとを肉お汁おめられ心肉の苦くくはと毎朝お我
室へ御経講を講し。後經を解き懇不教化ある日祖王の法絶
の痛み伝はまきり。鏡巻お鏡せうけ。は東陽花を雲結ふうけり白猪の
あくさうの巻ひて産右おまぬるる。鏡法果く鏡の面は伝法をむわ
はめ。後若が密よをさうけり。おまうのめあわさる。おとまうあくさる。さ
まは鏡々さう。お鏡お英女の涙をさる。紅袴の下より狐尾九のぬさう
伝はさう。お熱も作の如くいさぬおありてこそゆへとまが文覺呵と笑ひ
細工お不鏡或いはれて。吊伎や餘針の幸若せし。増茂お珍。お宝。おのこ
種。細。お不。研。お膠。水。お解。おめ。お画。おを。鏡。おう。た。火。お。焼。お。斤。お。時。お。は。して。磨。け。お
そ。の。お。画。の。お。筆。痕。お。き。え。お。より。お。字。お。る。お。不。笑。お。う。べ。お。と。お。今。お。懸。お。鏡。お。記。お。これ。お。鬼
戯。お。ま。れ。お。試。お。ま。ざ。り。お。し。お。墨。お。書。お。日。お。伝。お。の。お。物語。お。き。く。お。み。つ。け。て。お。の。必。お。あ。御。お。え

我の亦 紫守と一發の雲せさせんと法の如くあつりするふあひしよりハ
手際よしと業行も法である。自画をて所とよされどもいとおとされが
丹墀朱欄の梅園を火宅とあつて道せぬト是れが難を伴も猶如茶
の方使るよりや心へさしとさそん仏も疑惑教ト祇王の今の塵
計。おみ加る雲もほと刀自と祇女とせつるよりともお上りく悦べば文を
又猶笑尼をさへあつたぬ。辰若の頼政が女あふびる名を呼ぶる穢婦人
先年緒國の御のおう。津國昆陽の辺りて高よりつて秋及を
あむむ小女面少女を男のとて入軒淫せんとする所へ往らうはささるふ疑
て男の女と尋ねて去りぬ彼女我をねしを信むの淫者の如くあを道は
佛僧の揚くとを信ふし連り父よ者一夜をぬきせられし。その女の
てい糸陽花と喚男は母又とどまじし梅も辰若と云者。一糸陽花
あて花んまのおんより。雲はし教を必りせしよとと磨き花と勝ど
疑ひもるは糸陽花のまの辰若のを園て。あつるはしと故ありて
知さども今のうまはし浄海法匠の理を感れせきを。明筆を証書しめ
鷲を極め慈を律はし論者終ふ者ハ深園のを簿筆をばたせむを
あつる者ハ屏おへ返せられ。雲はしと梅と切溝血はけりて花咲かす。
あつるもよし化の皮引剥れんとあつるも界穢者と知らるるのみを寵
衰へね威を減せ頼政父子の病もあつるね。運命のまを待の御は
来春ハ彼清あつるの親を寄扉あつと算べし鏡を冥宝よ。あつてあつる
集めゆらん辰若の相入道ハ暴悪を勸るハ姻妃が殿の討まふあつる



文覚

佛の尼

祇玉尼

母刀自

祇女尼

文覚
一境
遊、時
職の
幻
鏡
用
ふ
鏡
の
影



相國稱佛施財 焚香
奉泉有功 德否曰無

阿波民部

賜女



大相國

大相國

玉幼御指角力。獨双六。是亦同熟。奇しう。此結縁の前後のまれば

鶴冠のやうなを懸。男の後のと後。頭尖了と。眞跡不似たり。なるふるま

ね地はひ。さるあもつと。ねい。せの作風。あくあそひ。上るても又下るても。うり

著小倉の八重。二重。花の中。なる花。をと。具。眞由。月々。み。林。公。何。業。と。呼

女の揚舞。教。由。英。れ。が。技。由。能。操。あ。も。ま。ま。る。この。控。さ。る。の。花。色。の。好。物。を

ひ。と。り。て。う。れ。寄。ゆ。り。ん。さ。も。も。妾。と。し。こ。り。が。さ。ゆ。し。り。を。と。お。笑。か。入。道。奥。を

の。下。旬。あ。ぢ。さ。い。と。同。車。も。て。清。あ。る。へ。出。出。あり。帝。王。の。仍。幸。の。ま

あり。一。の。人。乃。は。か。と。り。べ。う。り。や。の。限。の。意。と。う。毀。ち。く。人。一。人。乃。左。ふ。あ。り

ゆ。が。例。あ。れ。ば。市。日。より。お。ち。る。店。の。芝。居。由。ま。へ。て。屋。根。の。屋。根。た。い

後。と。萌。し。を。た。も。る。あ。ぐ。小。腰。し。え。ん。寺。内。由。寺。お。ゆ。い。と。度。く。ち。う。

か。つ。ぬ。の。の。櫻。の。本。と。と。佛。前。の。莊。嚴。も。て。宗。帳。信。の。法。甲。斐。交。ち。う。く

去。せ。と。は。佩。劍。の。欄。小。流。手。と。う。け。ぬ。人。へ。い。い。は。經。を。憑。と。い。ふ。縁。を。憑。と。い。ふ。

世。と。せ。い。ま。は。下。民。等。の。中。の。の。種。姓。の。あ。や。し。き。由。又。い。を。合。衆。人。の。世。り

藤。次。も。る。れ。え。昔。し。さ。君。の。夫。子。あ。は。し。つ。死。て。天。下。一。人。の。大。王。と。れ。ば。終。身

小。僧。し。ま。あ。く。せ。葉。等。小。小。屋。を。獲。せ。ぬ。い。今。小。初。ま。る。る。み。あ。の。信。し。た

勝。女。の。女。の。志。を。憑。し。く。あ。り。の。ち。う。せ。き。と。え。あ。け。し。後。心。の。科。と。を。き。む。く。と

の。ち。う。せ。き。と。え。あ。け。し。後。心。の。科。と。を。き。む。く。と

血を懐きよものなまじとせし人道怒りて知らげけりしを帝ふはさるる。

さうばま層を拂ふよりさうとをえぬ又は惜し道の者等を傍へよび。

断髪してせしむるは敵の同者かまてせしむるも殺敵ふかそれく。

何ぞせんそれ入拒まが活すわけしと云捨原君のし来るのとせしむ。

せしむるをむ出裏坊へせしむるせしむるは紫陽花のまの種は室乃。

申すて批をあらわゆる鏡をん。又かくさすといふふり。針こそく。

怪し當寺古来の什宝。或は新し得るうと。又い位持のし。

一戸扉の物目の希夜は養美ささるる乞食法師がこれの唐土討まの。

さらさら烟にが容をさめし。又後なれば宝物も並べて鏡人よえさる。

と弟子のゆ録のまよはし。け方あらびりし。奇しきのみみ。

ゆるさるるといふ紫陽花のらく怪し。きりきり。寄て。

裏の文極はわがえ有うく。あべきそ。あ。紙王が局へ招れて。

一遊びし折るは後をふ架しをえて奇しき文極は愛いし。欲。

かひしおさるれば。か。やん。揺る。又入道聖。放下作。

あやしき文極の類さへめされて技をわとさせ。とめて。奥の。

はせあひ。本筋を多くさるひ日されて般ふゆさせたまひぬ。

本編の最後挿の巻乃。以。離。とあられ。と編の末。記。せる。

概畧の話し。話ゆ。おさる。五編の後。巻の威風を。似て。

る。尾の挿巻も吹敷さ。や。惨。踏。毒。の。陀。賣。火。賣。さ。て。

頼朝が囚獄の文。場。悲。哀。あれ。は。鉄。衣。の。浮。橋。が。ま。み。見。

發 術 書 林

大坂

三都妖婦傳四編畢

山	山	和	關	須	英	小	山	須	出	綿
崎	崎	泉	田	原	原	林	城	原	雲	屋
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	寺	喜
藤	青	甲	嘉	伊	人	新	佐	茂	萬	兵
紅	兵	兵				兵	兵	兵	次	衛
衛	七	衛	七	八	助	衛	衛	衛	郎	

弁の對面おとこのあつ公ふん堂どうをま若わかやるせるるや勢せい源げん者しや句ご
 らま計けいみま願ねん末まとま丹にまま青あくくるる若わかくくのの約やく条じょう六ろく
 編へんままくく系けいのの巻まきとと結むすびび七しち編へんままくく説せつ記きをを市いち守しゅ長ちやう者しやがが榮えい枯こ
 のの世せ結むすりり大だいままのの次じ篇ぺんのの末ままま中ちゆうままむむ

函
壘
集